

令和5年8月実施

佐渡市議会 会派視察報告書（政風会）

広島県呉市、香川県直島町、岡山県倉敷市

▼【概要】会派視察の名簿・日程

◆会派視察名簿

職名	氏名	備考
政風会 代表	室岡 啓史	文責
政風会 幹事長	山本 卓	
政風会 経理責任者	林 純一	
政風会 顧問	坂下 善英	
計	4名	

◆会派視察日程

- 8月2日（水）午後：広島県呉市 【大和ミュージアム及び海上自衛隊呉史料館の現地視察】
└ 産業遺産の保存・活用方法及び平和教育について
- 8月3日（木）午後：香川県直島町 【瀬戸内国際芸術祭各アートスポットの現地視察】
└ 瀬戸内国際芸術祭を基軸とする観光振興施策について
- 8月4日（金）午前：岡山県倉敷市 【倉敷美観地区の現地視察】
└ 倉敷美観地区のまちなみ保存、利活用について

▼【概要】 広島県呉市の会派視察

◆広島県呉市（くれし）について

呉市は、広島県の南西部に位置する市。瀬戸内海に面しており、中核市に指定されている。地形的に天然の良港と言われ、古くは村上水軍の一派が根城にしており、明治時代以降は、帝国海軍・海上自衛隊の拠点となっている。第二次世界大戦中は、帝国海軍の拠点でもあった。2005年3月20日に周辺の安芸郡音戸町・倉橋町・蒲刈町、豊田郡安浦町・豊浜町・豊町を編入した。これによって呉市は本州にある地域と下蒲刈島、情島に加え、南の倉橋島、上蒲刈島、豊島、大崎下島を加えて人口25万人規模の市となった。2016年の中核市指定と同時に保健所政令市に指定された。

造船・鉄鋼・パルプ・機械・金属などを中心とした臨海工業都市として発展している。また、大和ミュージアム・てつのくじら館など海軍・海上自衛隊に関する博物館がある。戦前は呉海軍工廠において世界最大の戦艦でもある「大和」などが建造され、東洋一の軍港・日本一の工場として知られていた。



【出典】 ウィキペディア

呉海軍工廠は、早くから出雲安来の和鋼に着目し、先端的な軍需鉄鋼研究の拠点でもあった。このため、太平洋戦争末期には呉軍港において米軍の空襲を受け、大きな損害を受けている。

2010年代現在、防衛・軍事関連施設は観光資源ともなっている。2016年には「鎮守府 横須賀・呉・佐世保・舞鶴～日本近代化の躍動を体感できるまち～」として日本遺産に認定された。

くれし
呉市



国	● 日本
地方	中国地方、山陽地方 中国・四国地方
都道府県	広島県
市町村コード	34202-5
法人番号	9000020342025 編集
面積	352.80km ²
総人口	203,517人 [編集] (推計人口、2023年6月1日)
人口密度	577人/km ²
隣接自治体	広島市、東広島市、江田島市、安芸郡坂町、熊野町、豊田郡大崎上島町 愛媛県：松山市、今治市
市の木	かし
市の花	つばき

▼【画像①】 広島県呉市の会派視察（大和ミュージアム） 4



▲大和ミュージアム（地上4階）外観
通算来館者1,500万人超、改修予定



▲1/10の戦艦大和模型、原寸大のゼロ戦や特殊潜航艇などを展示



▲子ども向けのワークショップ、体験型スペースで科学も学べる



▲第31回の企画展。リピーター獲得のためには必須の取り組みと認識

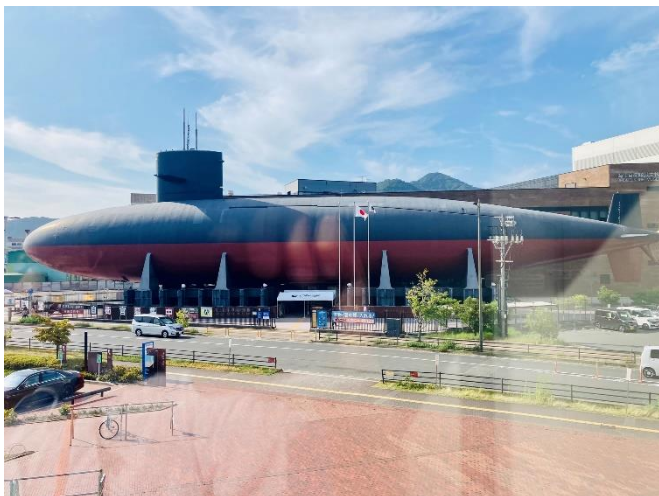


▲当日の配布資料。建設費は65億（建物40+展示20+緑地5億）



▲大和ミュージアム4階にある研修スペースで市職員と意見交換

▼【画像②】 広島県呉市の会派視察（海上自衛隊呉史料館）



▲海上自衛隊呉史料館（通称：てつのかじら館）は、無料の自衛隊広報施設



▲自衛隊情報コーナーには双眼鏡が設置され、海の船などが見られる



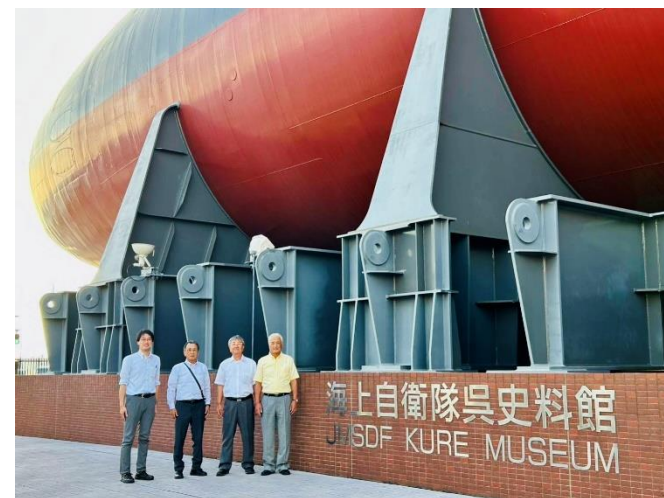
▲海上自衛隊の歴史や潜水艦・掃海艇の活躍について実物やパネル展示



▲機雷除去の活動は、終戦から現在まで継続されているとのこと



▲任務を遂行した潜水艦あきしおがクレーン船で陸揚げ、展示の経緯



▲海上自衛隊呉史料館の元潜水艦、あきしお前での集合写真

▼【内容・所感】 広島県呉市の会派視察

◆呉市海事歴史科学館「大和ミュージアム」の概要

▼平成17年竣工、事業費は約65億円

(建築費40億円+展示20億円+緑地5億円)、

通算来館者数は開館から17年間で1,500万人超

コロナ前は、年間90万人が訪れており、多い時は1日1万人の来場者があった。メインスペースに10分の1サイズ(26.3m)の戦艦「大和」が展示されている。戦艦大和は全長263mで史上最大の戦艦。その他、第二次世界大戦中のゼロ戦や魚雷など、歴史的資料を数多く展示している。行楽シーズンに家族や友人と訪れる観光地としての認識が定着しつつあり、教育旅行の目的地としても認知されている。コロナ禍においては、近場で平和学習のニーズが強まり、広島県内からの来訪が増加した。

指定管理制度の運営団体としては、凸版印刷、トータルメディア開発研究所、日本旅行、ビルックスの4者JVとして運用している。指定管理料は令和4年度が4,000万円。

▼どのように産業遺産の保存・活用を達成したのか

呉の歴史の紹介がメインであり、海軍工廠(艦船、航空機、各種兵器、弾薬などを開発・製造する大日本帝国海軍直営の軍需工場)等の資料を研究し、明らかになったことを展示している。

▼軍港としての歴史をどのようにPRしているか

広島原爆資料館とセットでの来訪ニーズがある。また、松山市・坂の上の雲ミュージアムと今治市・村上海賊ミュージアムとの広域連携事業も行っており、呉と海軍における情報について三館連携をしている。

▼平和教育をどのようにしているか

博物館として、「史実の提供」を心掛けている。収集済博物館資料約23万点の保管・研究が必要である。

▼課題と今後の展望

オープンから18年が経過し、令和6年度から約35億円でリニューアルを行う。その後も約30億円を想定し、約23万点の資料を保管する収蔵庫も設置する予定。

∴まとめ

わずか30年で東洋一の軍港にまで成長した呉において、戦艦大和と戦争そして平和をどう伝えているのか生の声を聞くことができ大変参考になった。ご自身を含むボランティアガイドの方も来館者で歴史に詳しい方もいるので、日々研鑽を積むことはもちろん、お客様から学ばせていただく気持ちで案内するとのことであった。

気づきの第一に、戦前からの産業遺産を活用した地域活性化の大いなる成功事例であると認識した。今後、「佐渡島(さど)の金山」の世界文化遺産登録がなされた後の本市においても必要な取り組みとなる。ガイダンス施設きらりうむ佐渡などの展示についても常設展示に加えて、企画展のようなこともより積極的に取り組む必要があると思う。

第二に、諸般の事情から賛否が出る案件への対処方が参考になった。具体的には「事実に基づいた資料による説明」という手法は、本市においても継続的に行っていく必要があり、かつ、対外的にも有効な施策ではないかと考える。金山開発における歴史調査業務の一層の推進が必要と感じた。

▼【概要】香川県直島町の会派視察

◆香川県香川郡直島町（なおしまちょう）について 【出典】ウィキペディア

高松市の北約13kmの瀬戸内海に位置し、岡山県玉野市の南に約3kmの位置にあり、直島を中心とした大小27島の島々で構成される。直島町は香川県に属しているが、経済的には距離の近い岡山県側に大きく依存している。電力は中国電力から、水道は玉野市から供給を受けており、生活必需品や精錬所への資材もその多くが岡山側から搬入されている。岡山県が直島町からの越県入学を認めているため、玉野市内の高校に通学している高校生も多い。

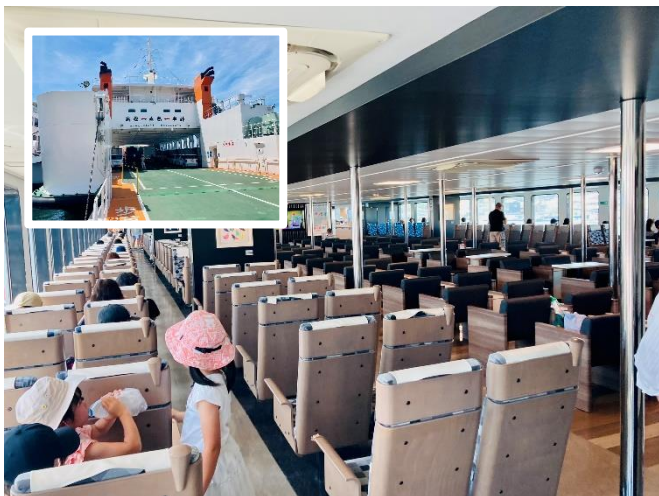
いくつかの島は、三菱マテリアル直島製錬所の操業により煙害ではげ山となっていたが、戦後まもなくから植林の努力は続いている。特に荒神島の緑は近年見事なまでに復活している。北側一帯の木が枯れたように見えるのは2004年（平成16年）1月の山林火災のためであり、現在は煙害は無いに等しい。直島の南側は緑豊かな海岸となっており、瀬戸内海国立公園に指定されている。井島は岡山県と香川県の県境が存在し、南側が直島町に属している。井島は日本本土以外で唯一島内に県境を持つ有人島であるが、現時点で直島町側は無人となっている。



近年、「直島南部を人と文化を育てるエリアとして創生」するための「直島文化村構想」を発表し、1992年にホテル・美術館の「ベネッセハウス」建設などへと拡大する。直島でしか見られないプロジェクトや建築は国内外からの注目を集めるようになった。2005年には地中美術館、2010年には李禹煥美術館が開館し、本村の中もカフェや民宿等ができるなど徐々に変化しつつある。

なおしまちょう 直島町	
	
ベネッセハウスミュージアム棟	
	
直島町旗	直島町章
1989年11月3日制定	1989年11月3日制定
国	● 日本
地方	四国地方 中国・四国地方
都道府県	香川県
郡	香川郡
市町村コード	37364-8
法人番号	9000020373648
面積	14.22km ² (境界未定部分あり)
総人口	2,997人 [編集] (推計人口、2023年7月1日)
人口密度	211人/km ²
隣接自治体	岡山県：玉野市 ^[注 1] (海を挟んで隣接) 香川県：高松市、小豆郡土庄町
町の木	黒松
町の花	ヤマツツジ

▼【画像①】香川県直島町の会派視察（瀬戸内国際芸術祭）



▲直島フェリーあさひの広い船内は統一したデザイン（定員500名）



▲宮浦港、海の駅なおしまフェリーターミナル（設計：SANAA）



▲宮浦港及びベネッセミュージアム至近カボチャアート（草間彌生氏）



▲空き家を再生した、ANDOミュージアム（設計：安藤忠雄氏）



▲瀬戸内海の島々が見える地中美術館入口（設計：安藤忠雄氏）



▲環境へ配慮した、直島町役場隣の直島ホール（設計：三分一博氏）

▼【画像②】香川県直島町の会派視察（瀬戸内国際芸術祭）



▲家プロジェクト①：護王神社を再建した杉本博司氏のガラスの階段



▲家プロジェクト②：築200年の家屋を改修した宮島達男氏のアート



▲家プロジェクト③：四畳半にある須田悦弘氏の椿の彫刻アート



▲家プロジェクト④：元歯科医院を丸ごと改装した大竹伸朗氏のアート



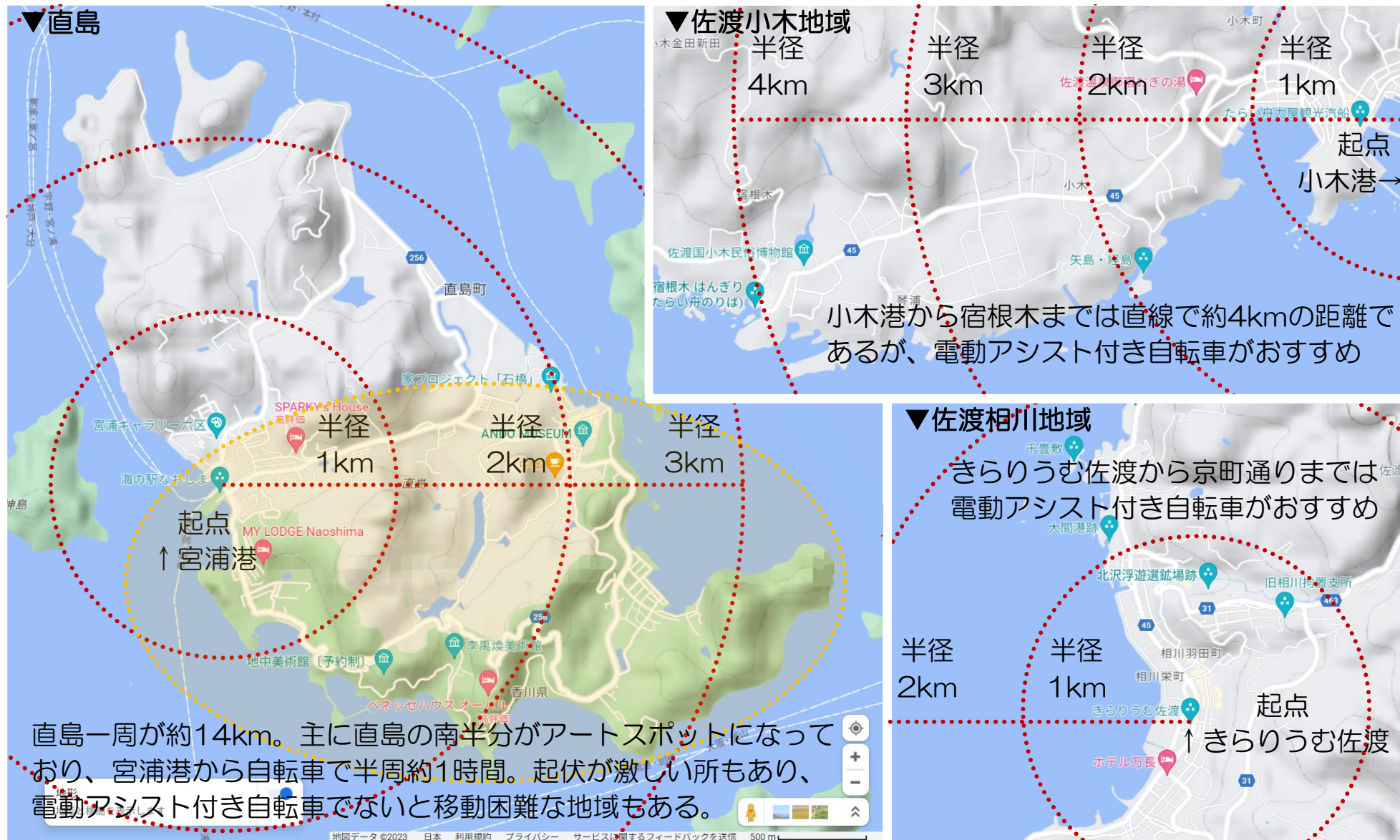
▲家プロジェクト⑤：製塩業の空き家を改修した千住博氏による襖絵の滝



▲現在も入浴可能な銭湯をリノベーションしたアートスポット

▼【画像③】香川県直島町の会派視察（瀬戸内国際芸術祭） 10

◆直島と佐渡相川・小木地域との同縮尺地図での比較について 【出典】Googleマップ



◆直島アートプロジェクト、瀬戸内国際芸術祭の概要

▼産業廃棄物問題を抱えていた島の再生に向けた発想、観光振興において、変わったことは

福武總一郎氏が、瀬戸内海の島々の自然が踏みにじられている状況に対しての「怒り」が発端である。直島・豊島（てしま）・犬島（いぬじま）をはじめとする瀬戸内海の島々は、1934年に日本で最初に国立公園に指定された美しい景観を誇る場所であったにもかかわらず、行き過ぎた近代化や都市化の負の側面として、豊かな自然がダメージを受けた。1987年以降、まず直島から徐々に変わり始めることになる。

「瀬戸内海の島に世界中の子どもたちが集える場を作りたい」と願っていた福武書店（現・株式会社ベネッセホールディングス）の創業者・福武哲彦氏が急逝し、その意志を継いだ息子の福武總一郎氏が、直島の一角に1989年に安藤忠雄氏監修による「直島国際キャンプ場」をオープンさせた。これが、直島に対する人々のイメージを変えていくことになる大きな第一歩となった。

その後、文化を育てるエリアとして創生する「直島文化村構想」を立ち上げた。1992年にホテルと美術館が一体になった「ベネッセハウスミュージアム」が開館。1998年からは本村（ほんむら）集落の中で展開する「家プロジェクト」がスタートし、2004年には新たな安藤建築である「地中美術館」がオープン。

こうした展開は、直島から犬島・豊島に広がり、2008年には「犬島精錬所美術館」が、2010年には「豊島美術館」がオープンし施設が増えていった。

▼2010年からは、これら3つの島などを中心に

「瀬戸内国際芸術祭」の会場にもなっていった

これらの島々は現代アートの聖地として、世界中から多くの人々が訪れる場所へと生まれ変わっていった。直島のシンボルにもなっている草間彌生氏の「南瓜」をはじめ、野外展示が話題になっているが、当時はまだ、野外にアートを展示するという取り組みは珍しかった。豊かな自然の中で現代アートを見せるという「自然とアートと建築の融合」という直島の大きなテーマの一つが確立されていった。

一方で、1998年から直島の本村集落のなかで展開する「家プロジェクト」は、アーティストが使われなくなった家屋などをアート作品として再生させるもので、地域の文化や歴史を掘り起こす方向性を重視している。「時間」に対する問い、「自然と人間の関係」、「生と死」といったテーマや「時代に対するメッセージ性」などが明確化されていった。

また、直島銭湯「I♡湯」を手がけた大竹伸朗氏は、文明や時代の流れの中で機能を失っていく様々なものを使った作品を生み出している。「犬島精錬所美術館」の柳幸典氏の作品からは、過度の近代化批判や現代社会への疑問といったメッセージ性が強く感じられる。豊島は、産業廃棄物の不法投棄により、ゴミの島といわれたが、緑豊かな自然や湧き水を湛える豊かな島であった。そうした歴史を踏まえて、内藤礼氏と西沢立衛氏による「豊島美術館」は“水滴”のかたちをしており、内部では泉のように水が湧きあがる、自然の豊かさや生の循環を反映した作品である。

▼【内容・所感②】香川県直島町の会派視察

▼アートツーリズム推進の取り組み

香川県では、2003年からアートツーリズムを推進する取り組みを始めており、翌年には若手職員グループが、島々を舞台にした国際美術展の開催を知事に提言していた。また1992年にベネッセハウス・ミュージアムを開館し、直島で活動していた直島福武美術館財団（当時）が、2005年にそれまでの活動を踏まえ、瀬戸内の島々をアートで結ぶ「瀬戸内アートネットワーク構想」を発表したことなどを背景に実施された。

直島では長い時間をかけて、瀬戸内の美しい自然景観の中に、地域の人と協力しながらアートや建築を作り、地域の魅力を顕在化・可視化してきた。その結果、今でも島のお年寄りや来島者の方に、作品や島の暮らし・歴史を語り、自分たちの住んでいる島・地域に誇りを持ち、笑顔があふれるゲストと島民の交流が生まれ、人々が幸せに暮らすコミュニティになっている。

瀬戸内国際芸術祭2022は、「海の復権」をテーマに、瀬戸内海の12の島々と2つの港周辺を舞台にして、春夏秋冬の3会期、計105日間開催、来場者数72万人（1日あたり6,900人）であった。コロナ禍で海外来場者が大幅に減少し、2019年比：約61%に留まった。

▼芸術祭への市民参画意識の醸成は

地域の方々には、アーティストとの協働による作品制作や受付、地域の特色を活かした食の提供のほか、あたたかい出迎え・見送りなど、多くの方々に関わっていただき、芸術祭を一緒になって作り上げ、盛り上げていただいている。地域活性化や再生につながるこうした取り組みが増え、着実に根づいてきている。

また、芸術祭を支えるボランティアサポーター「こえび隊」には、多くの方が作品制作の補助や作品受付などに参加している。「企業・団体ボランティアサポーター」としても、県内外から大勢の方々が参加し、地域住民や来場者との交流を行っている。芸術祭の趣旨に賛同いただける企業・団体に対して協賛を募った結果、262企業・団体から過去最多となる現金、現物協賛をいただいた。ちなみに、瀬戸内国際芸術祭2022の作品数は214で、ボランティア・スタッフと協力しながら運営した。

▼常設展示作品の維持管理方法はどのように行うか

恒久作品の維持管理は、財団と行政が協議の上行っている。「大地の芸術祭」の越後妻有（つまり）里山協働機構が事業の幅を広げるのは、大地の芸術祭の作品を将来にわたって「守る」ためである。芸術祭は初開催の2000年から回を重ねるごとに規模を拡大、総作品数が約380点に増えた。十日町市と津南町は作品改修費として約3,200万円の予算を計上した。さらに作品の維持管理にも年間数億円がかかる。同機構は両市町からの委託を受け運営している。

また、こえび隊（瀬戸芸サポーター）、こへび隊（大地の芸術祭サポーター）が、芸術祭の作品管理受付、ツアーガイド、作品制作サポートなど多岐にわたる活動を、地域の方々との協働の中で展開している。加えて、農作業や除雪、祭礼参加など、地域の暮らしに寄り添った活動も行っている。

<https://setouchi-artfest.jp/files/about/archive/report2022.pdf>

https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kanko_vision/kanko_kaigi_dai35/siryou2-2.pdf

▼【内容・所感③】香川県直島町の会派視察

▼空き家利活用の事例はどういうものがあるのか

瀬戸内国際芸術祭では、「家プロジェクト」をはじめ、持ち主から許可を得てアーティストに委ね、空き家を作品にしている。大地の芸術祭では、通年で宿泊できる施設にしたり、陶芸家が集まって作品とした「うぶすなの家」は、地元の人たちが食事を提供するレストランとして、常時お客さんを受け入れている。

∴まとめ

2003年からアートツーリズムの取り組みが始まり、20年が経過していることもあり、国内外での認知度は向上している。インバウンド観光客や情報感度の高そうな若い女性のグループも多い印象であった。SNSでの情報発信による好循環が生まれている印象を受けた。そもそも、直島は手ごろな大きさと、レンタサイクルで気軽に周ることができる。飲食店も多く、島民も協力している雰囲気伝わってきた。

佐渡市においても、さどの島銀河芸術祭を継続するに当たり、まず100を超えるアートスポットの用意と、相川地域・小木地域のようにエリアを分けての運営が最良と感じた。また、ボランティアスタッフのチーム化や企業・団体による現金、現物の協賛など、産学官民連携が必要であると再認識した。すなわち、

- ①行政が広報プロモーションや地域との調整役
- ②民間組織がアート作品のプロデュース・維持管理
- ③美術系大学から芸術家の卵として参画してもらう
- ④市民からは自分自身が芸術家として、また芸術家を支えるボランティアサポーターとしての参画

といった役割分担が肝要という気づきを得た。

19. 芸術祭 2022 の収支状況 (3カ年)

大祭の2022年(105日間)は、10億円予算で約72万人の来場!

(1) 収入

(単位:百万円)

区分	2020年度	2021年度	2022年度 (見込み)	計 (見込み)
負担金	25	312	387	724
香川県	10	100	135	245
関係市町	15	112	152	279
福武財団	0	100	100	200
補助金・助成金	14	32	75	121
寄付金・協賛金	4	126	101	231
チケット・グッズ等販売収入※	0	3	136	139
その他	1	3	57	61
小計	44	476	756	1,276
前年度繰越金	-	8	280	-
収入 計	44	484	1,036	1,276

※各種チケットの総売上げ約208百万円から諸経費を差し引いたものを関係者間で按分したもの、グッズの総売上げ約79百万円から得られる手数料収入など。

チケット売上2億円/客単価5,000円として⇒約40,000人が購入

(2) 支出

(単位:百万円)

区分	2020年度	2021年度	2022年度 (見込み)	計 (見込み)
アートプロジェクト費	20	109	493	622
作品制作・イベント費等	20	108	461	589
式典等開催費	0	1	32	33
運営活動費	16	69	440	525
広報活動費	11	44	67	122
交通対策費	0	0	30	30
会場等運営費	1	18	332	351
事務局運営費	4	7	11	22
チケット・グッズ関係費	0	26	29	55
支出 計	36	204	962	1,202

(3) 収支差額

【出典】瀬戸内国際芸術祭
2022総括報告書

(単位:百万円)	
収入 ①	1,276
支出 ②	1,202
収支差額 (①-②)	74

<https://setouchi->

artfest.jp/setsu_system/fileclass/img.php?fid=press_release_mst_20230

[20817473353026fa8191cb15baa4fc5040cf0bea1](https://www.setouchi-artfest.jp/setsu_system/fileclass/img.php?fid=press_release_mst_20230)

(参考:芸術祭2019)

収入	1,324
支出	1,145
収支差額	179

▼【概要】岡山県倉敷市の会派視察

◆岡山県倉敷市（くらしきし）について

【出典】ウィキペディア

白壁の町並みが残る倉敷美観地区、本州と四国を結ぶ瀬戸大橋などで知られる。中核市・保健所政令市に指定されている。岡山県下では県庁所在地で東に隣接する岡山市に次いで第2位（中国地方では第3位）となる約47万人の人口を擁し、岡山市や周辺自治体と共に岡山都市圏を形成している。また、備中県民局の本庁が置かれ、県西部（高梁川流域圏）の中核都市としての機能も有する。

市中心部の倉敷川沿いの一帯は江戸時代に幕府直轄領（天領）になったのを機に繁栄し、和洋織りなす白壁の町並みが今も美観地区として保存され、県内有数の観光の街としての顔をもつ。一方、臨海部には石油コンビナートなど重化学工業地帯が形成されており、市内の製造品出荷額（2016年）は3兆円超に上るなど、西日本を代表する工業都市の一つでもある。



倉敷地域の倉敷美観地区周辺は吉備の穴海（児島湖と児島湾の原型）と呼ばれた内海に浮かぶ鶴形山と向山によって形成された鶴形島（円亀島、阿智島）を起源とする。倉敷の名前が登場するのは近世になってからであるが、以前より水夫（かこ）の港が現在の船倉町辺りにあったとされる。水夫達は周辺で行われた数々の戦いに関わり出され、水軍として活躍したといわれている。ちなみに中世の高梁川河口は現在の水江・船穂町柳井原・船穂町水江付近である。

くらしきし
倉敷市





国	● 日本
地方	中国地方、山陽地方 中国・四国地方
都道府県	岡山県
市町村コード	33202-0
法人番号	6000020332020 🔗
面積	355.63km ²
総人口	469,494人 [編集] (推計人口、2023年7月1日)
人口密度	1,320人/km ²
隣接自治体	岡山市、玉野市、総社市、浅口市、小田郡矢掛町、都窪郡早島町 (海上で隣接) 香川県：坂出市、丸亀市
市の木	クスノキ
市の花	フジ
市の鳥	カワセミ

▼【画像①】岡山県倉敷市の会派視察（倉敷美観地区）



▲旧倉敷紡績工場跡地を再生しているアイビースクエア入口での集合写真



▲模型 工場の一部を解体し、中庭空間をピアガーデン等に利用する



▲蔦を絡めて環境効果を出す努力を当時から行っていたとのこと



▲旧倉敷紡績工場跡地と町並みの境目 煉瓦壁と古い商家とのコントラスト



▲運河と柳と太鼓橋の風景。無電柱化されており、当時の風景を再現

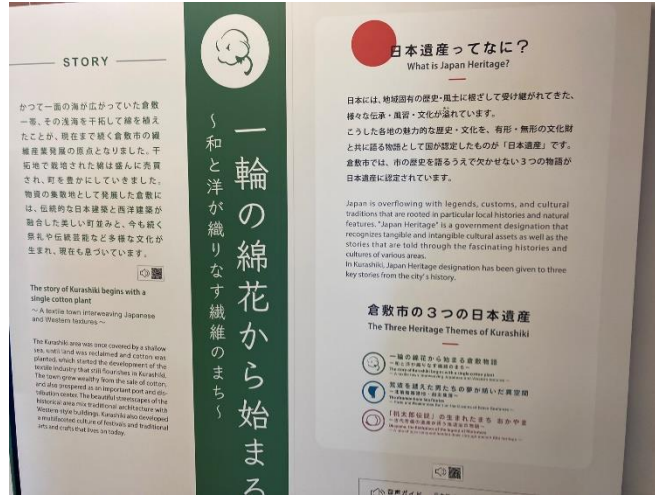


▲倉敷川畔伝統的建造物群保存地区 夜の運河の風景は幻想的で美しい

▼【画像②】岡山県倉敷市の会派視察（倉敷美観地区）



▲洋風の倉敷館は元倉敷町役場。1階が観光案内所、2階が休憩所として開放



▲倉敷市には3つの日本遺産があり、綿花から始まる繊維のまちの説明



▲江戸後期から繊維産業が発達して現在も学生服やジーンズ等を生産



▲大原美術館新児島館（仮称）外観
大正11年 旧中国銀行倉敷本町支店



▲倉敷川畔の柳と歩行者専用道路
右は日本初私立の大原美術館入口



▲大原美術館の庭とモネが描いたパリ郊外の池から株を分けられた睡蓮

◆まちなみ保存の維持管理費と観光客誘致機能

▼まちなみ保存の主な保全・維持の事業

- 電線類地中化事業（倉敷美観地区2022年完成済）
3期に分けて総延長2.64kmで総工費35.8億円。
- 夜間景観照明事業161万円（2022年度）
夜間に美観地区を幻想的なあかりでライトアップする取り組み。平成17年に世界的な照明デザイナーの石井幹子氏がプロデュースした。平成17～22年の間で総事業費3.7億円。

▼まちなみ保存に係る費用対効果

1968年に倉敷市伝統美観保存条例を制定し、行政としてまちなみ保存の取り組みを始めてから、倉敷美観地区の観光客数は増加傾向にあるが、まちなみ保存の維持管理と観光誘客の費用対効果の因果関係は不明である。ただし、まちなみ保存のための維持管理をすることで、映画やドラマのロケ誘致（令和4年度：27件）や2010年 都市景観大賞「美しいまちなみ大賞」、2012年 アジア都市景観賞大賞などの受賞やまちなみ保存のストーリーが日本遺産に認定されるなどの成果につながっている。

▼観光ガイドによる仕組み・ガイド養成の状況

観光ガイドの仕組み（倉敷美観地区周辺）については、ボランティア①・②とプロ③のガイドが存在しており下記のとおり活動している。

- ①倉敷地区ウェルカム観光ガイド連絡会：約40名
- ②倉敷善意通訳会：約20名 英語（中国語・韓国語）
- ③有料観光ガイド倉敷案内人グループ：約12名
1グループ5人まで：2,000円

▼ガイド養成、助成制度

倉敷市や倉敷観光コンベンションビューロー（観光協会）では養成しておらず、各団体内で研修などを実施して養成している。倉敷観光コンベンションビューローがボランティアガイドの活動について助成。団体内で研修をする場合の費用についても助成している。

∴まとめ

年間450万人以上の訪問者がある観光地区として、その景観や施設等の維持管理には莫大な財政的支援が必要ではないかと考えていたが、事実としては倉敷紡績（創業家：大原家）という民間企業が中心となり発展したこともあり、現在でも民間活力が十分に活用されていることが素晴らしい事例である。

特に、倉敷代官所跡地に明治22年から倉敷紡績所（現クラボウ）が稼働し、その役目を終えた後には、昭和49年から倉敷アイビースクエアがホテルとしての営業を開始している。そして、大原総一郎氏や彼の構想する倉敷のまちづくりを建築家として支えた浦辺鎮太郎氏らが「自分たちのまちは自分たちで守る」という理念のもとに成し遂げられていることが分かった。

電線地中化事業については、1mあたり100万円以上のコストを費やしており、本市の宿根木、小木町や京町通り、両津湊など地中化を推進するべき地域はあると思うものの、財源確保が必要であると再認識した。

本市においては、公的財政支出による歴史的資産の維持管理が優先され、民間活力の導入、活用が不足していると感じる。官民連携の観点からも今後の政策に対して参考にできる点が多々あると再認識した。